

平成 31 年 4 月 24 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16632

研究課題名（和文）ジャンセニスム論争と「恭しい沈黙」 - 内心の自由をめぐる思想史的研究 -

研究課題名（英文）Jansenist Controversy and Respectful Silence: Historical and Philosophical Research of a Liberty of Conscience

研究代表者

御園 敬介 (MISONO, Keisuke)

慶應義塾大学・商学部（日吉）・准教授

研究者番号：60586171

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：近世フランスにおける「ジャンセニスム」をめぐる引き起こされた宗教論争に関する研究をおこなった。とりわけ、争点となった「恭しい沈黙」という態度に注目することで、十七世紀から十八世紀にかけての論争の総体を視野に収めることが可能となった。この研究により、ジャンセニウスの遺著『アウグスティヌス』（1640）の出版がフランス王権やローマ教皇庁を巻き込む一大事件に発展する過程が理解されるとともに、その過程で繰り広げられた信と不可謬性をめぐる論争の内実が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、以下の三点にまとめられる。第一は、これまで定義困難とされてきた「ジャンセニスム」を生成の観点から捉え直すことで、その歴史の読み直しを可能にした点である。第二は、その過程で、絶対王政確立期のフランスにおける宗教と政治の諸権力が連携しながら発動する機構を解明したことである。第三は、ジャンセニスム論争を、信をめぐる認識の問題、もしくは服従をめぐる規律の問題として位置づけることで、その歴史的意義を明らかにしたことである。

研究成果の概要（英文）： We undertook a study of the religious controversy about 'Jansenism' in early modern France. The special focus on the attitude called 'Respectful Silence', a major point of contention, enabled us to cover the whole polemic from the 17th to the 18th century. As a result of this research the process was found by which the publication of Jansenius's Augustinus (1640) lead to an affair involving the French Monarchy and the Roman Curia, as well as informing the content of theological disputes regarding notions of faith and infallibility.

研究分野：フランス思想史

キーワード：ジャンセニスム ポール＝ロワイヤル アルノー

1. 研究開始当初の背景

平成二十七年度に本研究を開始するに先立ち、平成二十四年度から平成二十六年にかけて、科学研究費の交付を受けた研究課題「近世フランスを中心とした信の観念史的研究」(若手研究B、課題番号 24720038)を実施した。これは、近世初期のヨーロッパにおいて「信じること」の認識論的な側面に関心を寄せ始めた神学者の系譜を辿る試みであったが、そこで重要な意味を持ったのが、十七世紀のジャンセニスム論争であった。その論争では、教会の正式な決定を個々の信徒がどのように信じるべきかという問いが先鋭化しており、論争に参加した学者たちは、この「信」のあり方について原理的な考察を行っていた。彼らはみな熱心なカトリック教徒であり、その神学的・政治的な立場にかかわらず、信教の自由を自ら主張することはなかったが、他方で、関わった文筆家たちの中には、信仰問題における「良心」が教会の声であるとしても、それ以外の問題では「良心」は理性の声であると主張する者があった。こうして提唱された「内心の自由」は、適用領域が限定されることで、逆に普遍的な契機を内包する主張として現れており、その意義と射程の研究が重要な研究テーマになり得ることが予想された。

しかし、その段階では、上記の問題に正面から取り組むことはできなかった。主眼は信をめぐる哲学的考察の追跡に置かれており、何より、争点となったジャンセニスム論争特有の観念である「恭しい沈黙 (silence respectueux)」に関する調査がなされていなかったからである。そこで、研究代表者は、先行研究を参照しつつ問題のありかを検討した結果、この観念をめぐる積み重ねられた思考の成果が、従来の寛容の歴史から抜け落ちた重要な議論を提出するものでありながら、これまで研究対象として意識されていなかったことを理解し、その観念の生成と受容を中心とした思想史的研究を構想するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、西欧において内心の自由への意識がどのように生まれてきたのかを明らかにすることにある。近世ヨーロッパの知識人のあいだで活発に議論された信教の自由については、これまで多くの研究がなされてきた。しかし、そこでは、宗教の枠組みを超えた個人の精神的独立を求める声が明確な立論を伴って現れてきた時期や経緯についての説明は与えられていない。本研究は、近世フランスにおける「ジャンセニスム」をめぐる論争、とりわけその中心的な争点となった「恭しい沈黙」の観念に注目することで、その欠落を補完し、寛容や良心をめぐる思想史に新たな光を投げかけようとする。

ところで、スペイン領フランドルの司教ジャンセニウス(一五八五～一六三八)の神学思想に由来する「ジャンセニスム」をめぐる論争は、時間的にも空間的にも近代ヨーロッパを覆う規模の事象であり、その論点は多岐に及んでいる。本研究は、ジャンセニスム抑圧政策がもっとも強力に進められ、それに応じて濃密な議論の応酬が見られた十七世紀後半から十八世紀初頭にかけてのフランスを主たるフィールドとして、争点の一つであった「恭しい沈黙」をめぐる論戦の意味を理解しようとする。

3. 研究の方法

本研究の方法は、「恭しい沈黙」が思想史的にどのような意義を有する観念であったのかを明らかにすることを念頭に置きながら、同観念の生成、受容、およびそれに対する批判を順次検討していくものである。それは、ジャンセニスムをめぐる論争の思想的 content と、それを生み出した歴史的状況とを合わせて考察することを前提としている。したがって、資料としては、一方では、論争に参加した神学者や聖職者たちが公表した著作物および彼らがやりとりした書簡が参照され、他方では、王権や教会(ローマ教皇庁およびフランス聖職者会議)の公文書と内部文書、および同時代もしくは事後に作成された回想録や日誌が用いられる。これらの資料は、フランスとヴァチカンの関係図書館・古文書館に所蔵されており、それらを収集し、読解し、解釈することが、本研究を支えるもっとも基礎的な手法となる。

4. 研究成果

本研究の成果として、以下の五点が挙げられる。

第一の成果は、ジャンセニスム論争を歴史記述の論争として捉え直す視点を提示したことである。「恭しい沈黙」の生成過程の理解には、十七世紀後半にカトリック教会が「ジャンセニスム」を排斥するためにとった一連の政策を総合的に理解することが求められる。本研究は、この「反ジャンセニスム」を、公的な歴史の構築すなわち歴史記述の営為という観点から理解する可能性を示した。十七世紀半ばに始まるジャンセニスム抑圧運動は、当初から政治的な様相を呈したが、その実質的な原動力となったフランス聖職者会議は、一六五〇年代半ばから、王権と教皇庁および自らが発表した公文書を整理し、出来事の経緯を叙述することに意識的であった。聖職者会議の審議報告の印刷と改訂作業はその最初の成果であり、それはやがて「ジャンセニスムの歴史」の執筆につながっていく。他方で、ポール＝ロワイヤルの側でも、修道院の改革を記述する試みが始まっており、その活動は、論争の激化とともに、抵抗の戦術としての歴史の叙述へと性格を変えていく。こうした歴史記述をめぐる対立は、十八世紀に入ると、記憶をめぐる闘争として再燃することになる。

第二の成果は、争点となった「恭しい沈黙」の意味内容を明確にしたことである。従来、こ

の観念は、「ジャンセニスト」の戦略的な態度の一つと見なされ、正面から考察されることはなかった。これに対して本研究は、それが十八世紀に至るまで論争の核心に関わる争点であり続けた事実に注目し、次の点を明らかにした。すなわち、その表現は、神学者アントワーヌ・アルノー（一六一二～一六九四）が信仰宣誓書初版（一六五六）への対処の過程で初めて使用したものであること、それは権威への恭順を意味する一方で、「内的な信念」による同意の拒否をも意味する両義的な態度であったこと、そして、ポール＝ロワイヤルの神学者たちはその方針に一定の共通理解を持っていたことである。こうした知見は、その補足的な成果として、ジャンセニズムを理解する仕方そのものに関する考察へと発展した。なぜなら、引き受け手を欠いた「ジャンセニズム」という異端の形成には、反ジャンセニズム政策のみならず、「恭しい沈黙」に代表されるジャンセニウス擁護派の態度も一役買っていたからである。これまでジャンセニズムは、その定義不可能性ゆえに扱うのが困難なテーマとされてきたが、それは敵対し相反する勢力の相関関係の中で形作られた異端、すなわち生成する異端として捉え得る対象なのである。

第三の成果は、「恭しい沈黙」をいわば受容したとも言える「教会の和約」（一六六九）の政治・宗教的背景について、正確な叙述をおこなった点である。十七世紀のジャンセニズム論争に一時的な終止符を打ったこの和約については、教会史家フィリップ・ディウドネによる研究があるが、その検証作業はまだなされておらず、また、和約の成立経緯に関わる肝心の部分について、ディウドネの記述は必ずしも明晰ではない。本研究は、フランス外務省古文書館およびヴァチカン古文書館に残された資料をもとに、大勅書「レギミニス・アポストリキ」（一六六五）に依拠した反ジャンセニズム政策が、「教会の和約」という一種の妥協に転じた過程を辿ることで、一部の高位聖職者たちがアルノーらポール＝ロワイヤルの神学者の立場を司教中心主義に取り込みながら継承し表明することで事態を劇的に変えていった点を明らかにした。「ジャンセニスト」に有利ともいえる和平案をローマ教皇庁が受け入れ得た事情については、一六六八年九月に署名反対派がローマに送った一通の手紙に見られた曖昧な表現の意味するところを分析することによって、一定の説明を与えた。

第四の成果は、「恭しい沈黙」を正当化する理論的立場を思想的に位置づけたことである。「恭しい沈黙」が、教会の権威に寄せるべき「信」の内実に関する思索を伴っていたことは、従来の研究でも指摘されてきたが、本研究は、同じ土俵に上がって議論を展開した反ジャンセニストたちの理論をも併せて考察することで、そうした一種の認識論を総合的に捉え直すとともに、それらが十七世紀末の聖体論争における方法の問題と深く関連していることを明らかにした。聖体の秘跡、とりわけパンと葡萄酒におけるキリストの臨在と実体変化をめぐる、カトリックとプロテスタントが十七世紀を通して激しい論争を繰り広げたことはよく知られているが、世紀後半には、そのような議論を支える方法論の問題もまた、論争の中心的テーマに浮上していた。それは、あえて図式化するなら、信仰の基準を個人の検討に委ねるか、共同体の権威に求めるかという対立として現れ、結果として、信じるという認識行為の構造を掘り下げる試みに連結していた。世紀中葉のアルノーから世紀末のデュプレシ・ダルジャントレに至る思考の痕跡は、そうした試みの展開と変容をよく伝えている。

第五の成果は、十八世紀初頭における「恭しい沈黙」への批判を通して、十七世紀のジャンセニズム論争を相対化する視点が得られたことである。「教会の和約」から数十年を経て論争が再燃したとき、槍玉に挙げられたのはやはり「恭しい沈黙」であった。そして、その際にもっとも大胆な立場から立論を提示したのはカンプレの大司教フェヌロンである。フェヌロンは、キエティズムをめぐる論争で披露した「著者の意味」と「テキストの意味」の区別という発想を武器に、独特な反ジャンセニズム論を展開した。それは、事実問題と権利問題を分けて考える論敵の思考の枠組みを乗り越えようとする注目すべき批判であったが、実質的には、教会の不可謬性が啓示された真理を超えて有効であると主張するものであったため、多くの批判を招き、最終的には孤立した立場にとどまった。やがてフェヌロンは、権威の射程を測る手法をあきらめ、真理の提示すなわち教父アウグスティヌスの教理の正確な意味を明らかにする作業へと移行する。この挫折は、信仰宣誓書への署名強制を理論的に正当化する必要に迫られた十七世紀の反ジャンセニストたちの理論的限界を浮き彫りにするものであった。

以上五つの研究成果については、その一部を日本語とフランス語による論文として発表するとともに、本研究の最終年度に、ジャンセニズムの歴史を生成の観点から読みなおす学術書にまとめた。「恭しい沈黙」をめぐる論争とその背景を探ることは、「ジャンセニズム」をめぐる論争を総体的に捉え直す試みそのものだったからである。この総合化の作業により、「恭しい沈黙」は、信の観念史から良心の自由を求める声が立ち上がる分岐点として捉えられることになった。

他方で、積み残した課題もある。その多くは十八世紀のジャンセニズム論争に関わる事象である。まず、本研究では、十八世紀における「恭しい沈黙」への批判とその意味を考察する段階にまで進むことはできなかった。新しい政治的文脈のもと、この問題についていかなる議論が続けられ、それが思想的にどのような意味をもつものであったのかを検討することは今後の課題である。同時に、十八世紀におけるジャンセニズムの歴史記述の問題も、本研究の枠内では十分に扱うことはできなかった。十八世紀の「ジャンセニスト」は、前世紀の記憶を利用すべく、さまざまな回想録、書簡集、伝記、資料集を戦略的に編纂したのであり、その実態を解明することは、今後のジャンセニズム研究の重要な課題となろう。それは、ポール＝ロワイ

ヤルが破壊された後にポール＝ロワイヤルの神話が形成されていく過程を追う作業につながるはずである。本研究は、ジャンセニスムとポール＝ロワイヤルを別物として区別し、後者の研究をいわば犠牲にすることで、前者の意味を問うた。とはいえ、よく知られているように、両者の結びつきはやはり密接である。その結びつきを解きほぐす鍵は、ポール＝ロワイヤルと記憶の問題にあるように思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Keisuke MISONO, « Le problème de l'« analyse de la foi » dans la controverse anti-protestante d'Arnauld et de Nicole », in *Passions géométriques. Mélanges en l'honneur de Dominique Descotes*, études réunies et présentées par Agnès Cousson, Paris, Honoré Champion, 2019. 印刷中、査読無
御園 敬介 「「ジャンセニスム」を語ることは可能か」、『日吉フランス語フランス文学』、第63号、2016年、p. 1-17. 査読無

〔学会発表〕(計2件)

御園 敬介 「「ジャンセニスム」を語ることは可能か」、『パスカルとジャンセニスム：歴史の記述と認識』(「表象のパスカル パスカル学への新たな寄与の試み」第3回公開研究会) 慶應義塾大学、2015年12月19日
御園 敬介 「歴史記述の試みとしての反ジャンセニスム」、『17世紀研究会、2015年度例会、西南学院大学、2015年7月19日

〔図書〕(計1件)

御園 敬介 『ジャンセニスム 生成する異端』、慶應義塾大学出版会、2019年、印刷中